

馬は古い友だち

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

この十ヶ月、乗馬にかよっている。小二の息子ひとひも一緒だ。最寄り駅から京阪電車で二十分ほど大阪方面へ走った樟葉^{くすは}。駅前から京阪バスに乗ってやはり二十分ほどで、乗馬クラブ「クレイン京都」につく。

はじめる前は、無縁だと思っていた。そうでしょう、乗馬なんてどこか別の世界のお金持ちが、子女の情操教育のために幼児期から取りいれ、キツネ狩りとかやって、で、落馬して頭打って急死、みたいな、キャンディキャンディの世界みたいなを想像していた。

今年のはじめ、近所のショッピングモールで、ポニーを従えた乗馬服のひとが案内の紙を配っていた。見れば、いままら無料で乗馬体験ができる、とのことで、時間のあいた休日、一家で樟葉まででかけてみた。

いるいる。当たり前だが馬がいる。サラブレッドはひを見ている気がしたことがある。鞍の上では、全身のバランスをとっていないとすぐさま落ちてしまうので、意識せず、当たり前のように体幹の感覚がつく。ごく自然に胸を張り、腰を据えて背中を伸ばし、理想的な姿勢がとれている。

また、小学生はまだだが、中学生にもなると、鞍をつけたり蹄を掘ったり、いわゆる馬装は、ぜんぶ自分でしなければならぬ。サラブレッドは間近で見ると、大人でも少し腰が引けてしまうくらいの迫力だ。その馬にひるまず、みずからの力で責任をもって装備をととのえる。胆力、気持ちが強くなる。

また、馬は乗り手の性格を見抜く。せつたいに嘘はつけないし、心情をつくせばこたえてくれる。ことばを使わないからこそ、気持ち、こころのコミュニケーションが大切になる。馬を思いやれる人間は、きっとひととを大切に

する人間に育つだろう。というわけで、子どもにとってある種理想的な習いごと、それが乗馬だった。また、カーキチで、動物好きなひとひにとって、「動物×乗り物」として、馬という存在は最高の相棒となったのだ。

レッド、アラブ馬、ポニー。京都競馬場が近く、もと競走馬も少なくない。ひとひはヘルメット、エアバッグ付きベスト、ブーツを借りだし、野外の小さなサークルで馬上のひととなる。宮古島で毎年、宮古馬でいーだ君に乗っているおかげで、大きな馬体への恐怖感はずゼロだ。

ベテランの先生に介助され、サークルを15分ほど歩いたあと、鞍から滑りおりたひとひの顔は、「なんでこれ通たらあかんのん。ふつう通うやん。いや、せつたい通いたい」という色に上気していた。

先生にきいてみて意外なことがわかった。乗馬クラブはどこも、入会金が高い。ある程度余裕がある家でないと続けにくいので、最初にハードルを高くするのだ。しかしこのクレイン京都は二年後、すぐそばの土地への移転を計画しており、それまでこの施設を使っていた乗馬は、なんと入会金無料だという。毎月

馬好きが高じて、京阪電車を途中下車し、京都競馬場に寄りたがる。いまの競馬場はサーキットと同じく家族で楽しめるエンタメ施設となっている。タバコを吸っているひとがスタンドにひとりもないのに少し驚く。マイルチャンピオンシップを懸け、馬たちが最終コーナーを立ちあがってくる。行け、はしれ、飛びこめ！若者やおじさんと一緒にひとひも腰を浮かせている。

馬に乗っているから、心身ともに、根っからの馬好きに。さらに、速い馬、強い馬を、当然のように応援したくなる。人類が物心ついたときから、馬は友として、暮らしのそばにいた。つまり馬好きは、時代も国も易々と

の会費と、一回ずつ（乗馬では一鞍という）の騎乗料しかからない。ひとひの目は馬そっくりにきらめいている。

馬の出でくる小説も書けるかもしれない。よし、と勢いに乗ってうなずいた。奥さんの園子さんも入りたそうだったけれど、家計のことを考えて泣く泣く身を引いた。

それからほぼ毎週、馬に会い、馬に乗りに行く日々がつづいている。乗物好き、動物好きのひとひは筋がよく、大人になってからはじめた僕は、ヒーコラ懸命に追いつがる。レッスンは一鞍45分。はじめは並足、といってゆっくり歩き、途中で速歩、といって小走りになる。速歩のときには鐙を踏み、馬の歩みのリズムに合わせ、鞍の上で立ち、座り、立ち、座り、をくりかえす。最初は内ももの筋肉がみみし張る。

こえることができる。こどもの頃に、からだごと馬に触れる経験をもつのは、早期からはじめるとどんな語学教育より、スケールが広く、雄弁、かつ人間が鍛えられる気がする。

もうすぐクリスマス。しかしひとひの頭は中山競馬場へ飛んでいる。一年を締めくくるレース、有馬記念。ひとひのイチオシは、障害から平地に帰ってきた古馬、オジュウチョウサンで決まりだ。



京都府京都市



面積: 827.83km²
総人口: 1,466,937人(推計人口、2018年4月1日)
人口密度: 1,772人/km²
市の木: シダレヤナギ、タカオカエデ、カツラ
市の花: ツバキ、ツツジ、サトザクラ
自治記念日: 10月15日

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない!」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

